

## 年頭のご挨拶 「森林産業」という視点 林産試験場長 菊地伸一



2016年を迎え、皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

林業や木材産業を扱う記事、資料を読むとき、「森林産業」という用語を目にすることがあります。たとえば、「森林の上に立って展開される森林産業」、「供給側と需要側を一体的にとらえた森林産業という発想」、「林業・林産業が一体となった森林総合産業」、「林業、林産業に加え森林バイオマスの活用なども含めた森林総合産業」。いずれも、森林資源を共通の基盤として成り立つ「林業」と「林産業（木材産業）」を一体的な産業として捉える考え方です。林業と林産業とが不可分なつながりにある一つの産業として、ともに栄え、発展していくことがイメージされます。また、森林を基盤に展開される、造林・育林～素材生産～木材生産～建築、このような供給と需要が連続する一連の活動が、ふたたび森林に還元される循環型の産業、の意味を込めても良いのではないかと思います。林産試験場自体、「林業と林産業のふたつは一体である。すなわち森林産業＝フォレスト・ビジネスとして考えるべきである」の発想によって設立されたことが、当時の林務部長の記述から読み取ることができます。では、この「森林産業」の発展をどのように図るのか、それに対し、私たち林産試験場は何を果たしていくことが求められるのか？

「森林産業」の発展を期待させる話題が昨年末にありました。東京五輪・パラリンピックの主会場となる新国立競技場に、「木と緑」をコンセプトとする、屋根構造に鉄骨と組み合わせた木材を積極的に活用するプランが採択されたことです。また、採用に至らなかったプランでも木材がスタジアムの構造に重要な役割を果たしています。このプランで描かれている木質材料は、約1.5×1.5mの断面、長さ19mの集成材です。樹種がカラマツであることなど、木材利用を進める私にとってはより魅力的なプランに思えることから、採択に至らなかったことに少々残念な気持ちを抱きました。しかし、採択されたプランであっても使用される木材の量が1千立方をこえると試算される、大きなプロジェクトであることに代わりはありません。都市で国産木材の利用を進める象徴的な存在となっていくだろうと思います。

この、「都市で国産木材の利用を進める」ことが森林産業の展開のキーワードだろうと思います。

建築の需要が圧倒的に多いものの、規制がきわめて厳しい都市で木造建築物を実現するための技術開発は2000年以降活発に行われてきました。その結果、たとえば、一般的な木造が認められない地域での建築を可能とした木造建築物が、首都圏で少なくとも2000棟以上は実現されています。さらに、4階建ての木造ショッピングビル、5階建ての木・RC混構造共同住宅、6階建て木・鉄骨混構造集会所施設など、大型の木造ビルも実現されています。また、技術開発の方向とは異なりますが、東京都港区では一定規模以上の建物に国産材の利用を促す制度を定め、使用実績を重ねています。これも、建築需要が多い都市ならではの取り組みと言えるでしょう。

都市での、非木質材料を木質材料に代替する需要に対応するためには、品質と性能、そして供給の安定性が必要となります。地域木材の利用において、性能とともに、供給が課題として指摘されることが少なからずあり、林業と林産業、すなわち森林産業として解決を図っていく必要があるだろうと考えています。

もとより、林産試験場の研究はここに示した建築材料分野にとどまるものではありません。林産試験場は森林産業に係わる一員として、今年もさまざまな分野で貢献していきます。引き続き、林産試験場へのご支援・ご協力を、そしてさらなるご鞭撻を心からお願い申し上げます。

本年が希望の持てる年となりますように。皆様の発展の年となりますように。